

## 野焼き文化が守る自然遺産

高橋裕二郎

飯田高原・ボウガツル野焼き実行委員会

A Natural Heritage Conserved by Fire

Yujiro TAKAHASHI

### はじめに

私たちの住む九重町は、阿蘇くじゅう国立公園内の九重山群の北麓に位置しています。国立公園指定の大きな要因の一つは、自然景観の美しさであると思っています。訪れる人々が九州横断道路から眺める眺望の美しさは草原景観のすばらしさであります。この草原の維持は明治時代以前の昔から地域住民の生活の一部であり、農耕用牛馬の食草で有り放牧地で有り、田畑の肥料の堆肥原料でもあり、茅葺き屋根をふくカヤを刈るカヤ場であり、ミノを編むミノカヤのカヤ場でもり、田舎の生活の一部で有りました。その大事な放牧地やカヤ場を維持していくための一大行事が野焼きだったのです。春先に去年の枯れ草を焼き払う事によりダニやツツガムシなどの害虫を退治し野焼きが草原への灌木の侵入を防ぎ新しい草が一齐に芽吹き緑のジュウタンを再生するのです。飯田高原を言い表す言葉に、春は黒 夏は青 秋は赤 冬は白 と表現されますが、春の黒は野焼きの後の真っ黒な野原の事で、夏の青は青々とした緑の草原の事、秋の赤はススキ野原の草紅葉や九重山系の燃え立つような紅葉の赤色の事、冬の白はもちろん雪の原の純白の白です。焼きの後の真っ黒な中から芽を出し一面に咲く黄スミレは場所によればまさに黄金の山となるのです。そしてみずみずしい新緑の中に咲くのがピンクのサクラソウです。風に波打つ柔らかな草原は夏の暑さを忘れそうです。秋の銀色に輝くススキの穂波は心洗われる思いをします。文豪川端康成は小説波千鳥の文中で「四方の山々に支えられて浮かんだ夢の国、ススキの穂波は白いのですが高原に紫がただよっているようです」と表現されています。そんな草原景観は野焼きによる住民たちの生活文化の継続により守られてきたものです。

### 九重町の野焼き

そんな野焼き文化の継続が、最近では難しくなりました。九重町も過疎と高齢化で無家畜農家が増え農業後継者が少なくなりました。野焼きをしようにも人手不足で出来ないのが現状であります。この問題を解決する為に私達は、地域の若い人達を集めて「飯田高原野焼き実行委員会」を結成したのです。組織を作ってもそのあとが大変です。地権者に加わってもらわないと土地の境界や焼くエリアがわかりませんし、地形やその日の風向きなどで火入れをする場所や方法などが違い、永い歴史の中でのコツや危険地帯や安全策などの部落の申し送りなどがあり、部落の世話人や長老に、最初のほうは指導をして頂かなければ焼けるものではありません。最初は実行委員会も資金がなくて部落の長老をお酒2升で加勢してもらい、野焼きのコツや方法を伝授して頂いた次第です。

野焼き実行委員会を結成して野焼きを初めて今年で14年になりますが、野焼きをするのは、ほとんどの人は当日の野焼きが大変だと思っていますが、一番大変で重労働なのは前の年の9月頃にやらなければならない防火帯づくりの草刈りなのです。地形の悪い場所は人がやっと登るような急斜面を草刈りをしながら登ったり下ったり巾を10m～14mぐらい刈るのですから、大変危険をとめない経験者でなければ危なくて簡単には頼めません。そ

んな急斜面を草刈りが終わった1～2週間後に草が枯れたら焼くのです。野焼きをするには実行委員は最低でも3日間かかるのですが、一番大変な仕事が世間には知られていません。ボランティアで野焼きに加勢しますと、よく申し出てくれる人がいますが、焼く当日だけと思いがちで参加すれば現地で写真が撮れるから言って来る人が多く、重たい水の入ったジェットシューターなどは背負いたくは無く、カメラだけ持ってついて来るような人が多いのが現状です。仮にボランティアの方を募集などとすると、仕事の内容や方法の指導をしなくては火の中に写真を撮りに入って危険なので、実行委員の有力メンバーがお世話係になり人手が取られるほうが作業上マイナスとなり、実行委員会としては原則ボランティアの募集はしないと思っています。

実行委員会と言っても私たちの呼びかけに応じて加勢をしてくれる地域の有志の方々が中心ですから、草刈り機は自前の機械を持って来て作業をしてくれます。奉仕作業ですからせめて機械の燃料は実行委員会で準備しますし、お昼のお弁当と3時のお茶は差しあげます。防火帯作りが班編成90人で2日間、野焼き本番が約200人で延べ380人にお茶とお弁当ですから野焼き経費もかかります。実行委員会の収入は、野焼き面積に町有地と九州電力用地がありその用地の防火帯を作ると言う名目で費用をいただいて民有地は野焼きをしてあげることで少し費用をいただくなどの収入で運営して来ましたので、緊縮予算で苦しい運営をしてまいりました。

同じ野焼きで、別組織の「ボウガツル野焼き実行委員会」がありますが、ボウガツルも野焼き当日は多い年は200人ちかい賛同者が協力をしてくれます。その経費は九州電力が全額負担をさせていただいており、今年で第11回目の野焼きを実施します。九州電力の関係者の方々には、大変感謝を致しております。

昨年より「飯田高原野焼き実行委員会」は、国土交通省の風景街道予算やアサヒビールの自然保護基金などをいただき、ジェットシューターや草刈り機などの備品を購入し、余りは繰越金として次年度資金にするなど組織強化をしているところであります。

野焼きは永く継続していく事に意味があり、それが自然保護や景観保全の運動、自然遺産を残す事であり、この運動を頑張って後世に残し、引き継いで行く事が私たちの使命だと思っています。



写真 九重町の野焼き風景